

2018年度宮城厚生協会新入職員辞令交付式

84名のフレッシュな仲間とともに



2018年度 辞令交付式

厚生協会だより

2018年5月21日
第 349 号

発行
公益財団法人
宮城厚生協会
〒985-0835
宮城県多賀城市下馬
二丁目13番7号
TEL 022-361-1113
FAX 022-361-1124
発行人：平賀秀夫

4月2日(月)、坂総合クリニック1号館8階会議室において「2018年度宮城厚生協会新入職員辞令交付式」が執り行われました。今年度は84名のフレッシュな仲間を迎えました。小熊信理事長と新入職員代表の梨田英恵医師のあいさつをご紹介します。

■理事長あいさつ

(公財) 宮城厚生協会理事長

小熊 信

皆さんおはようございます。公益財団法人宮城厚生協会理事長の「小熊」です。2018年度入職された仲間は84人であり、職員一同皆さんを歓迎いたします。

今、皆さんの胸中には新たなスタートを切る喜び、緊張、不安など様々な思いが交錯していることと思いますが、これからの社会生活を歩んでいくうえで、本日同期に入職し

た仲間とのコミュニケーションを大切に、お互いに励ましあいながらがんばっていただきたいと思います。

法人の沿革、概要、理念

最初に当法人の沿革、概要について紹介します。

当法人宮城厚生協会の原点は、1912年にまさしく今皆さんがいらっしゃるこの地に、「坂 定義(さかさだ よし)氏」という医師が私立塩竈病院を開設したことに始まり、その後1937年に創始者の名を冠して「坂病院」に改名されたことに遡ります。

坂先生によるこの地での貧しい住民への医療活動によって培われた「貧富の差に関わらず無差別の医療を実践する」という理念の元、より組織的、公益的な社会厚生事業を行うことを目的に、

1950年に坂病院を中核に「財団法人宮城厚生協会」が設立されました。その後坂総合病院として1955年、そして宮城厚生協会としては68年という長い歴史の中で、みずから変革を重ねながら、働く人々と地域住民の「いのち

と暮らし」を守ることに尽力して参りました。

その後、より公益性の高い事業体として2013年に「公益財団法人宮城厚生協会」に生まれ変わり、現在当法人は、4病院7診療所として7か所のケアステーションを擁する県内最大の民間医療事業法人に成長してきました。

そして「患者の権利を尊重し、患者に共感し患者と協同して、平等・安全の医療をめざしていく」ことを我々の組織理念として位置づけた上で、「差額ベッド」を持たずに「無料低額診療制度」を導入して、「公平で平等」な医療と介護の事業をめざしています。

これから皆さんが関わっていく医療介護事業は、診療報酬制度や介護保険制度などの公的制度に規定されるいわゆる制度事業であり、他のメーカーなどと違ってその時々の政治や行政の施策に大きく影響を受けます。とりわけ近年の自民党政権による社会保障制度の切り崩しにより、医療や介護を取り巻く環境は、厳しい状況となっています。



祝辞を述べる小熊理事長

このような中で私たちは、自らの主体的な組織力や経営基盤を強化し、我が国の社会福祉制度を政治的作爲によって後退させないように、様々な社会運動に取り組んでいます。

皆さんも今後は社会にも目を向けて、制度矛盾や社会的な問題の是正のために様々な運動に参加していくことを期待します。

新入職員に望むこと。 「ヒューマンな エピソード」から

堅苦しい話はこのくらいにして、皆さんに、ある地方新

聞に掲載された小さな記事を紹介したいと思います。それは、昨年七月に実際あったある初老の男性の体験談です。

「ある初老の男性は、羽田空港から九州の実家に行くために搭乗予定便の航空会社のカウンターを訪ねました。彼は、その数日前に長年連れ添った妻を亡くし、葬儀を終えて九州の菩提寺に納骨するために、飛行機に搭乗しようとしていました。遺骨を手荷物として機内に持ち込もうと考えていましたが、持ち込みが可能かどうか念のため確認するために、カウンターにいた航空会社の女性職員に次のように聞きました。

『妻の遺骨を手荷物として機内に持ち込んでも大丈夫でしょうか?』と尋ねたところ『どうぞ構いません』と女性職員が答えました。

彼は遺骨を抱えながら機内に入り、頭上の棚に入れました。間もなくすると一人のCA(キャビンアテンダント)が彼のもとにやってきて、次のように尋ねました。

『失礼ですが、お連れ様はどちらにいらっしゃいますか?』当初彼は、何を尋ねら

れているかわかりませんでした。だが、先ほどの空港カウンターの女性職員が機内のCAに連絡していたことを理解するのにそう長い時間はかかりませんでした。彼は頭上の棚を指差して、『上の棚に入れました』と答えました。するとそのCAは、『幸い席が空いていましたので、お隣の席を確保しておきました、お連れ様をご案内させていただきます』と言って、CAは、荷物棚から妻の遺骨を下ろして、彼の隣の席においてブランケットの上からシートベルトを掛けていきました。飛行機が離陸して間もなくそのCAは再度彼のもとに来て、『お連れ様は、お飲み物は何がよろしいでしょうか?』と尋ね、遺骨の前のテーブルにお茶を置いていったそうです。』

さて皆さんは、このヒューマンなエピソードをどのように受け止め、どのように感じ取られたでしょうか。

私は、組織の長として職員の成長は、どうあるべきかという観点から考えてみました。地上勤務の女性職員は、悲嘆が垣間見られた初老の男

性を眼前にして、「何らかの配慮をしてあげたい」と思いながらも老人は自分の持ち場から離れてしまったため、機内乗務員にその配慮を託したのでしょうか。そして連絡を受けたCAは、「この老人にどんな配慮をしてあげられるか」を自分自身の中で考えたのではないかと思います。

この航空会社の2人の職員は、妻を亡くし悲壮感を漂わせた初老の乗客として迎え、何かを感じ取り、それが誰からも指示されることなく彼女らの主体的な行動を惹起させたのではないかと思います。そこには、組織内における業務連携の成熟度の高さを見て取れるとともに、「安全、快適に乗客を目的地まで運ぶ」という自分たちの職業上のミッションへの強い使命感と一人の乗客に対する深い感性が彼女らの行動を後押ししたのではないかと想像します。

皆さんは、これから医療や介護を介して患者という生身の人間を対象に、その生命に直接・間接的に関わる業務に従事していきます。このような中で私は、先ほど紹介した

航空会社の女性職員のように、皆さんも患者さんに対して人間味あふれる行為を提供できるような社会人に成長されることを期待したいのです。

そのためには、患者さんの言葉・表情・行動などから様々な「想い」や「心情」を感じ取れる深い「感性」や高い「感受性」が備わっていることが必要です。しかし「想いを感じる」ことだけでは、必ずしも皆さんの行動を変革させることにつながるとは限りません。「患者さんから感じられた想い」が患者さんへの主体的な行動へつながるかどうかは、職業人として社会や当法人が求めているミッションが自分の価値観にどれだけ同化されているかに大きく影響されます。

皆さんには、今後当法人の理念を十分理解して、社会、法人から託されたミッションを具体的な行動につなげられるよう、主体性や感性の醸成に努力してください。

結 び

当法人の将来を担うのは皆さんです。われわれの事業は、

いわゆる労働集約型の事業であり、法人の発展は皆さんの成長に大きく依拠します。そのような点で皆さんは様々な経験や学習を通して人間として大きく成長し、私たちの法人内で社会人として活躍されることを心から期待して、歓迎のあいさつといたします。本日は入職おめでとう。



あいさつする梨田英恵医師

■新入職員代表あいさつ

正確な知識と技術を合わせ
もつ医療従事者になることを
誓います

医師 梨田 英恵

本日は、私たち新入職員のためにこのような式を開催していただき、誠にありがとうございます。

ございます。新入職員を代表いたしましたし、心よりお礼申し上げます。また、先ほど、理事長の小熊先生より温かい歓迎の言葉をいただきました。そして、期待で胸が膨らむと同時に、大変身の引き締まる思いです。

数年前から問題となっていた超高齢化社会や医師の偏在化に加え、最近ではAI医療の発展による医療のあり方に関する問題など、私たちの周りではめまぐるしい変化が起こっております。しかし、患者さんの不安に寄り添い、共感することは、未だ人にしかできないことです。私たち医療従事者が様々な問題に直面した際に最も大切になければならないことは、患者さんが医療を安心して受けていただけるように信頼関係を築く努力を怠らないことだと思います。

7年前の大震災の時、私は大学受験のため仙台に住んでいました。地震や津波の被害により、辛い思いをしている友人や知人にかける言葉が見つからず、お世話になった地域に何もお返しをすることが

できませんでした。復興が進む現在、このような私ではあります。今度は医療従事者として、この地域で学ばせていただくとともに、支えていく一助になることができればと思います。

私たちは、この道を志した希望や期待を胸に、病や痛みを抱えた人々の力になるべく、今日こうして、ようやく医療従事者としてのスタートラインに立つことができました。各々が初心を忘れずに、他者への感謝と思いやり、そして、正確な知識と技術を合わせもつ医療従事者になることをここに誓います。

また、諸先輩方の的確な指導を受け、一日も早く、一人前の医療従事者として患者さんに向き合うことができるよう、一生懸命努力してまいります。

ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、ご指導ご鞭撻下さいますよう、よろしくお願い申し上げます。

以上、簡単ではございますが、新入職員を代表しての感謝と決意の言葉とさせていただきます。

「第12回坂総合病院大規模災害 実働訓練2018」 実施



4月26日(木)の午後、約190名が参加し「大規模災害実働訓練」が実施されました。今回も塩釜地区消防事務組合にご協力いただきました。

訓練目的

訓練目的は①本部内の情報の流れ・管理・共有方法の検証。②情報伝達・共有方法(トランシーバー使用、メッセージャー)の検証。③患者情報

の集約・共有方法の検証。④エリアリーダーのスキルアップ。

設定は日勤帯想定

「14時、宮城県沖でマグニチュード9.0の巨大地震発生。塩釜地区で震度7の激しい揺れが観測され、大津波警報発令。傷病者、低体温症の患者が多数発生し、当院に押し寄せてくる可能性がある。」という想定。

模擬患者役の新入職員約40名は事前に、先輩職員に援助してもらい「ムラージュ(模擬患者特殊メイク)づくり。



ムラージュづくり



緊迫の災害対策本部

まもなく救急車搬送の負傷者や多数の被災者が次々と来院しトリージ開始。各エリ

14時訓練開始。1分ほど地震の揺れを想定したアナウンス。
地震発生 of 災害モード発動・全館緊急放送。セミナー室に対策本部設置。正面玄関にトリージポスト設置。院内被災状況確認、情報集約、入院患者対応、外来患者避難誘導、館内負傷者、帰宅待機者対応がされていきます。

訓練開始



赤エリア(救急室)

アで治療が行なわれます。容態変化への対応、応援要請、医薬品調達など本部と各エリアとの緊張したやりとりが間



次々と負傷者が



緑エリア(紹介外来前)

全体会

1階フロアで全体会が行なわれました。
はじめに、内藤孝院長があいさつ。まず、見学者の方々へのお礼の言葉を述べ、『毎回新たな発見があり訓練は進歩していると思います。改善すべき点を改善し、訓練を継続していくことが大切です。』

断なくあり、ランシーバーやメッセージャーを走らせ対応。
15時20分訓練終了。本部・エリアごとに反省会が行なわれました。



遠藤和彦先生

「講評」
○遠藤和彦先生(秋田厚生医療センター院長)
『それぞれの役割分担がきちんとしていて、すばらしい訓練でした。状況の変化に機敏に対応し、現場からの情報伝達と共有がしっかりとっていて、多くのことを学ばせていただきました。』と述べられました。

と述べました。
次に、県内外の病院や自治体関係者など見学者20名の紹介がされました。



山崎達枝氏

○山崎達枝氏(NPO法人災害看護支援機構理事長)

『訓練の賜物として大震災に対応できたのだと思います。このすばらしい訓練をぜひ外に向けて発表してほしい。黒エリアの対応が少し課題として残った感じがします。今後も期待しています。』と述べられました。
塩釜消防署と塩釜保健所からも講評をいただきました。



訓練継続し
今後に活かす



郷古親夫医師

最後に、郷古親夫災害対策委員会委員長があいさつ。『訓練を繰り返すたびに不備が出てきて次の改善策へとつながっていきます。その繰り返しで今日に至っています。訓練を継続し今後には活かし、災害に対する万全の体制を作っていきます。』と述べ終了しました。



小規模事業所への 安全衛生活動支援

法人労働安全衛生委員会事務局長 前谷津温子

法人労働安全衛生委員会では、方針の一つに小規模事業所のサポートを掲げました。労働安全衛生法では、従業員数50人未満の事業所では安全衛生委員会の組織や、衛生管理者の届出や週1回の巡視が義務付けられていないためです。

法人では毎月全事業所から病休や労災、産休、針刺事故などの状況を報告書で提出していただいて状況把握に努めています。しかしそれだけでは不十分ということで介護事業所の訪問を決め、新たに産業医を担っていただくことになった今田隆一医師が積極的に関わり、具体化してきました。

ケアステーションしおかぜを皮切りに介護事業所を訪問し、事業所やその周辺の様子を実際に見てヒアリングや産業医からアドバイスを行ないました。また、職員と顔を合わせることでそれぞれの事業所の雰囲気を感じることができ、それも含めて委員会で報告しています。

各ケアステーションでは計画的に衛生推進者を養成し、



健康職場としての向上に努めていました。他の事業所においても作業管理・作業環境管理・健康管理がより充実する

よう、安全衛生活動の強化に取り組むための基礎知識を持った衛生管理者の関りが課題となっています。



訪問先での懇談の様子



応援する鈴木真琴さん



さわやか **エッセイ**

高校球児の親を満喫

ケアステーション郡山所長 **鈴木 真琴**

我が家の子どもたちは小学生の時から野球をやっています。きっかけは2009年のワールドベースボールクラシック。ダルビッシュ投手の活躍を見て「ほくもダルビッシュになる!」と言い出した弟とそれに影響を受けた兄、ふたりでキャッチボールを始めたことでした。兄弟ふたり同じタイミングで始めてかれこれ9年…いまは大学、高校で夢中になってがんばっています。

チームの子どもの成長見守る

9年もやっていると、子どもも親たちも同じチーム、ライバルチーム、いろいろと知り合いが増えます。特に同じチームの子どもは毎週末練習で顔を合わせ、送迎やサポートを通してまるで自分の子どもと同じような気持ちで成長を見守りました。中学、高校と進学し、学校やチームはバラバラになりましたが「甲子園の予選で子どもも親も再会しようね」なんてよく話していたものです。

目指すは甲子園

そしてあっという間にそんな時がやってきました。あの頃はもっとずっと先のことと思っていたのに、今では次男が高校球児になり甲子園を目指しています。大会のパンフレットを見ると知っている名前を見かけ、その子どもたちが背番号をもらっているのを見て我が子のことと同じく喜んでいます。マーカーペンでチェックすると知っている子ばかりでカラフルなパンフレットになります。もちろん、子ども同士は試合やグラウンドで再会して楽しんでいます。親もスタンドで約束を果たし再会して「お互い年取ったねえ」なんて笑い合っています。試合なんかそっちのけで近況報告の話に花が咲いたりなんかして…。

応援で楽しむ

今の一番の楽しみはその中の誰かが甲子園に行くかもしれないことです。もちろん我が子の学校が甲子園に行けるのが一番ですが、誰が行ってもいいかな…なんて思っています。たまたま今年の春には、東北楽天の本拠地、楽天生命パークで試合があり次男が活躍する姿を応援することができました! やっぱりプロが試合をするグラウンドは一味違います。やっぱり目指すは甲子園! そこを目指して頑張る子どもたちを最後まで精一杯応援しながら残り少ない高校球児の親の時間を楽しんでいます。



プレイボール



試合の様子



試合の様子その2